悪性黒色腫の重複癌

子宮頸癌を合併した悪性黒色腫の1例

栗崎 道紀* 影下登志郎* 小野 友道*

Summary

A case of a 65-year-old woman with double cancers of malignant melanoma and cervical cancer was reported. She had black tumor, which was 10 mm in diameter, on her left forearm and underwent resection at a clinic. The histological finding showed malignant melanoma. She underwent wide local resection and chemotherapy. Careful physical and radiographic examination revealed to have a cervical cancer with stage IVa. We also described 7 more cases of double cancers of melanoma and internal cancer from our department data file.

はじめに

近年の診断技術および治療法の進歩により、悪性腫瘍の早期発見や患者生存期間の延長が認められるようになった。一方、それに伴い重複癌の報告も増加の傾向にある。しかし、悪性黒色腫との重複癌の報告は少ない。

今回我々は、悪性黒色腫の精査中に子宮頸癌を発見した症例を経験したので、当科における重複癌7例と併せて報告する。

症 例

患 者：65歳、女性

初 診：1995年9月20日

主 訴：左前腕部の黒色丘疹

既往歴：子宮筋腫

現病歴：20年前より左前腕部に直径5mm大の黒色丘疹に気付いていたが自覚症状がないため放置していた。2年前より徐々に増大し直径10mm大となり、その一部が隆起して時には出血するようになったため近医を受診し、切徐術を受けた。病理組織検査で悪性黒色腫と診断され、当科を紹介された。

現 症：初診時は切徐痕のみであった。近医での臨床写真から、左前腕外側に直径約10mmの黒色色素斑を認める。辺縁は不整で色調にはムラがあり、その中央は隆起している(図1)。所属リンパ節は触知しない。

病理組織学的所見：表皮内には胞体にメラニン顆粒を有し、核は大型で大小不同があり、異型性の強い腫瘍細胞が増殖し、胞巣を形成している。また、分裂像も散見される(図2)。さらに、この腫瘍巣の下方には、胞体の明るい小型の母斑細胞様細胞の集塊がみられ、これら2つの細胞巣は膠原線維で境界されているところも

* Michinori KURISAKI, Toshiro KAGESHITA, Tomomichi ONO：熊本大学皮膚科学教室

図 1. 臨床像.
左前腕外側に直径約10mmの黒色素斑を認める。辺縁は不整で色調にはムラがあり、その中央は隆起している

認める。また、母斑細胞様細胞の一部では、異型性のある細胞が混在している (図 3)。

S-100蛋白, HMB-45による免疫染色では、両者共に陽性であった。

以上の所見より、色素性母斑上に生じた表在拡大型悪性黒色腫 (pT₂N₀M₀, Level 3, tumor thickness 1.1mm, Stage I) と診断した。

治療および経過：手術瘢痕部より中枢側を 4 cm, 末梢側を 3 cm 離し、筋膜を含めて拡大切除術および全層植皮術を施行した。切除した組織内には、腫瘍細胞はみられなかった。術後は DAV・フェロン療法を 1 クール施行した。

検査所見：全身精査を施行したところ、腹部超音波検査で両側腎盂の拡張があり水腎症を認めた。

腹部 CT では、膀胱三角部に辺縁不整な腫瘍がみられ、これより中枢の尿管が拡張していた (図 4)。膀胱鏡所見では膀胱の後方からの圧排像がみられたため、骨盤腔内を精査した。

腔検診では、腔前壁の硬化とクルミ大の硬い腫瘤を触知、直腸診でも骨盤壁まで抵抗が触知され、腔細胞診の結果 class V で腺癌と診断された。

図 2. 腫瘍部の組織像。(HE 染色)
表皮内には、胞体にメラニン顆粒を有し、核は大型で大小不同があり、異型性の強い細胞が増殖し、胞巣を形成している

図 3. 腫瘍部の組織像。(HE 染色)
母斑細胞様細胞の一部では、異型性のある細胞が混在している

図 4. 腹部 CT 像.
膀胱三角部に辺縁不整な腫瘍がみられ、これより中枢の尿管が拡張している (↑)

図5. 子宮腔部病理組織像。(HE染色)
クロマチンに富んだ異型細胞が明瞭な管腔構造をとって浸潤、増殖している

子宮腔部病理組織像：クロマチンに富んだ異型細胞が明瞭な管腔構造をとって浸潤、増殖しており、浸潤性の腺癌の像を呈している(図5)。

癌浸潤が骨盤壁にまで達し、膀胱への浸潤が認められたため、子宮頸癌 stage IVa と確定診断した。

経過：悪性黒色腫は stage I で、化学療法施行後であったため婦人科転科、子宮頸癌に対して多剤併用 (CBDCA, ADR, MMC, 5-FU の動注) による化学療法を行っている。術後1年5ヵ月経過しているが、悪性黒色腫の再発転移は認めない。

考 按

高齢化社会が進むにつれて、重複癌の報告は増加してきているが、悪性黒色腫と他臓器癌との合併は比較的稀とされている。当科では30年間で、約200例の悪性黒色腫を経験しているが、悪性黒色腫と他臓器癌との合併は本例を含め8例(4%)あり、最近5年間で5例認めている(表1)。

平均年齢は66.3歳で男性は1例、女性は7例であった。悪性黒色腫の病型や発生部位には一定の傾向はみられなかった。合併した悪性腫瘍は消化器系癌3、子宮癌2、乳癌、肺癌、甲状腺癌がそれぞれ1例であった。悪性黒色腫のステージはI期5例、II期2例、III期1例であった。また、悪性黒色腫が先行して発見されたものが5例で、そのうち3例は悪性黒色腫の初回入院時の精査中に発見された。

悪性黒色腫と他の悪性腫瘍との合併は、本邦では23例の報告¹⁾があり、このうち、皮膚悪性腫瘍との合併したものが6例あり、これを除くと自験例の8例を含めて25例が他臓器癌との合併がみられたことになる。合併した他臓器癌は、本邦では消化器系、特に胃癌との合併が多く、呼吸器系の肺癌がこれに次ぐ²⁾。海外では、乳

表1. 熊本大学皮膚科における悪性黒色腫と他臓器癌の合併例

症例	年齢	性別	悪性黒色腫(病型,発生部位)	合併悪性腫瘍	先行病変	化学療法既往
1	54	男	mucous M stage II, 上口唇	肺癌	悪性黒色腫	有
2	69	女	N M stage II, 足底	甲状腺癌	悪性黒色腫	有
3	60	女	A L M stage I, 手指	脾臓癌	悪性黒色腫	無
4	71	女	A L M stage I, 右第1趾	子宮癌	子宮癌	不明
5	93	女	L M M stage III, 左顔面	直腸癌	悪性黒色腫	無
6	58	女	N M stage I, 左上腕	右乳癌	乳癌	有
7	61	女	A L M stage I, 右足底	S状結腸癌	S状結腸癌	有
本例	65	女	S S M stage I, 左前腕	子宮癌	悪性黒色腫	無

癌，白血病との合併が多くみられるという報告³⁾がある。これは本邦と海外とで単発癌の罹患率に差があるためであろうと考えられる。悪性黒色腫と他の悪性腫瘍との合併率が本邦では0.7%，海外では1.5%であるという報告³⁾からすると，当科では4%とかなり高率にみられる。

近年の診断技術の進歩により各種内臓癌の早期発見が可能となり，予後の改善もみられ，今後重複癌が増加する可能性がある。また，術後adjuvant chemotherapyを行うことが一般的となり，生体のimmunosuppressionの状態が続くことも，二次発癌に関与する可能性は否定できない。自験例のうち化学療法前に発見された3例を除く5例中4例が化学療法の既往があった。悪性黒色腫の術後の経過観察において再

発転移は勿論であるが，常に他臓器癌の発生も考慮すべきと考える。

文 献

- 1) 山本俊幸，森田恭一，大久保坦子，他：悪性黒色腫と有棘細胞癌を合併した1例。皮膚臨床，35：1425-1427，1993.
- 2) 安齋真一，渡辺修一，穂積豊，他：悪性黒色腫に腎細胞癌を合併した症例。臨皮，39：609-613，1985.
- 3) 石原和之：SCCにみられた重複癌。皮膚病診療，8(11)：1067-1071，1986.
- 4) Boland, S.L., Shaw, H.M., Milton, G.W.: Multiple primary cancers in patients with malignant melanoma. Med. J. Aust., 1: 517-519, 1976.